

吉村達也

宝島の惨劇

TOKUMA NOVELS 書下し長篇本格推理「惨劇」シリーズ





TOKUMA NOVELS

吉村達也

宝島の惨劇

発行者 徳間康快

発行所 徳間書店

東京都港区新橋四の一〇 郵便番号一〇五・五五

電話三四三三・六三三一 振替東京四・四四三九二

©Tatsuya Yoshimura 1994

落丁・乱丁はおとりかえいたします

Printed in Japan

〈編集担当 松尾賢次〉

ISBN4-19-850062-2

書下し長篇本格推理「惨劇」シリ

宝島の惨劇

吉村達也



徳間書店

TOKUMA NOVELS

目次

プロローグ——宝島からの手紙

第一章 残された日記

第二章 財宝眠る島へ

第三章 女神が吠える夜

第四章 嵐の夜に武士が来た

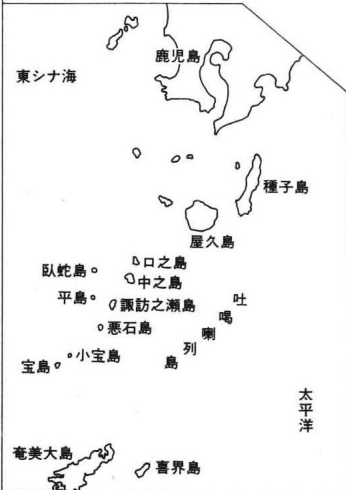
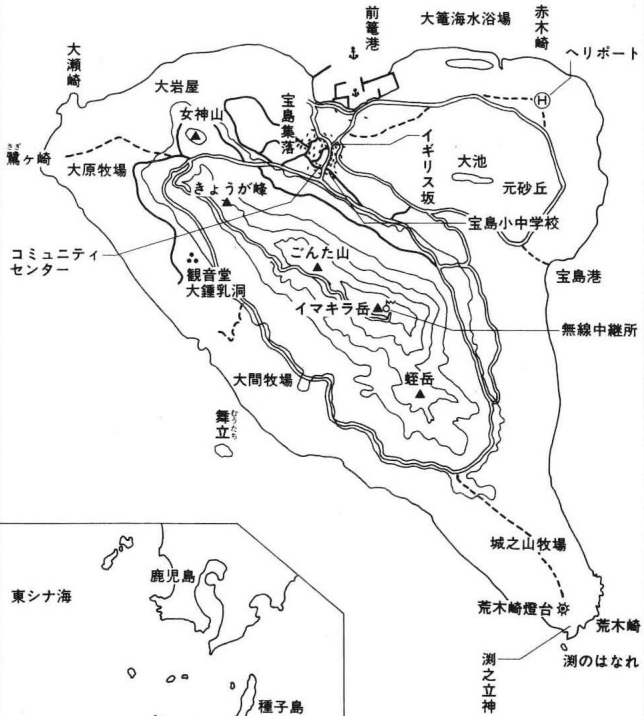
エピローグ——朝比奈耕作から山上謙吾への手紙

取材旅ノート 宝島

キャラクター別作品リスト

295 278 272 176 109 70 24 7

宝島



プロローグ——宝島からの手紙

「朝比奈さん、きょうはちよつと折り入ってご相談があるんですけれど」

港書房の担当編集者・高木洋介が、世田谷区成城にある推理作家・朝比奈耕作の自宅を訪れたのは、秋も半ばをすぎた十一月の初旬だった。

いつものように、クラシックな日本家屋の廊下に置かれた藤の応接セットに高木を招くと、朝比奈はその向かい側に座った。

ここ数日、早くも冬の接近を予感させるような冷えびえとした毎日がつづいたが、きょうは一転して春を思わせる穏やかな天気だった。

ガラス戸の向こうに見える日本庭園にも、温かな陽光がふりそそいでいる。この庭は、朝比奈の祖父が造りあげた自慢の作品である。

「ちよつとまぶしいね」

そう言って、朝比奈は薄手の白いカーテンをシャツと音を立てて引いた。

日差しが柔らかくさえぎられ、目が慣れるまでの間、周囲がずいぶんと暗く見えた。

「どうですか、朝比奈さん、最近は」

出されたコーヒーにちよつと口をつけてから、高木が切り出した。

「どうですか、つて？」

「ですから、ご執筆の状況は」

「それがねえ、なんだか妙な仕事を請け負ってしまつて」

「なんです、妙な仕事つて」

「志垣警部と和久井刑事に關係している話なんだけれどね」

「ああ、例のコンビですか」

高木は、これまでに何度か事件の現場で顔を合わせたことのある、警視庁捜査一課の二人を思い出した。

なぜだかわからないが、高木は、志垣警部というとすぐにダンブカーを前から見た姿を連想してしまふ。そして和久井刑事は——本人にはとても言えないが——そのダンブカーのバックミラーにぶら下がっているマスコット人形、といったイメージだ。

とにかく、それくらいこの二人はいつもいっしょにいる。

やたらとパワフルでエネルギーな志垣警部と、どこか母性本能をくすぐるような頼りなさを漂わせている若手刑事の和久井とは、なぜかウマが合うようで、ほとんどの事件において、彼らはペアを組んで捜査に当たっていた。

「このごろ、志垣警部たちは妙な事件に巻き込まれることが多いらしくてね、つい最近も富士山頂で起きた『日本最高峰の殺人』というのに遭遇して、なにかと大変だったらしい」

「週刊誌で読みましたよ、それ。『富士山殺人事件』つて名づけられた事件でしょう」

「うん」

「でも、なんでまた警視庁捜査一課の二人が、山梨県警の管轄で起きた事件を捜査するんですか」

「山梨県警じゃなくて、静岡県警だよ」

カフェオレ色に染めた髪を片手でかきあげながら、朝比奈は訂正した。

「富士山は北側が山梨県警、南側が静岡県警の管轄なんだけれど、お鉢と呼ばれる頂上周辺は、すべて静岡県警の持ち場になっているんだ」

「妙なことに詳しいんですね」

「本になるからには、いやでも覚えてしまうよ」

「本になるって？」

「つまりね、その『富士山殺人事件』をドキュメントタッチで書いてほしいという依頼があつて、だったら、個人的にもよく知っている志垣さんと和久井さんの視点から事件を描いていくのもいいかな、と思つたんだ。警視庁捜査一課の二人が、富士山のてっぺんで起きた殺人事件に巻き込まれるいきさつをね」

「その依頼、どこからです」

「某社」

「ちよつと、朝比奈さん。それ、もう手をつけちゃつたんですか」

高木は、あせつた顔でたずねた。

「うん」

「まいったなあ……」

「なんで？」

「その某社の企画は後回しにできませんか」

「そうはいかないよ。それでも原稿依頼の順番を守ることでは定評があるんだから」

「どこが」

いままでさんざんな目に遭つてきている高木は、不信任いっぱい目で朝比奈をにらんだ。

「いつときますけどね、朝比奈さん、ウチは朝比奈さんに山ほど貸しがあるんですよ」

「だけど、ほら、いつぞやの大雪山で起きた首なし殺人事件があったでしょ。高木さんも札幌までついてきた、あの一件」

「ああ、あれね」

高木は、忘れるわけがないでしょう、といった顔でうなずいた。

「締め切りを大幅に遅れたおかげで、通常の印刷所では間に合わず、ぼくの両親が経営する印刷所が暮れも正月もない態勢で原稿を待つことになったやつですね」

「はい」

「そうやって周りに大迷惑をかけながら、それでもなお大先生は、北海道まで行かないと原稿が書けないとワガママ言っ、寝台特急『北斗星』のいちばんいい客室で札幌へ向かった、アレですね」

「そうです」

「しかも、親友の平田さんが事件に巻き込まれたらしいからと、ぼくに無断でカンヅメ中のホテルから抜け出しちゃった、あの事件ですね」

「ごめんね」

ひとこと謝ってから、朝比奈はつけ加えた。

「でも、あの事件をドキュメント風に書いて、港書房から出したじゃない」

「あの本は担当がちがいますから。あれをやったのは、ウチの浦山でしょ」

「そうそう。お酒飲むと、ところかまわず、すぐ眠っちゃう女の子なんだよなあ」

「朝比奈さん、まさかそのスキに乗じてへんなことしてないでしょうね」

「してない、してない」

朝比奈は、顔の前でパタパタと手を振った。

「そういうときにかぎって、目をパチツと開けそう

なタイプなんだもん、あの人」

「どういうタイプなんですか、それ……ま、とにかくですね」

高木は、口調をあらためて言った。

「ぼくに対する借りは、まだまだ返しきれないほど残っているはずですよ」

「つまり、もっと新作を書けということでしょ」

「そうです」

「でも、ぼくは寡作^{かき}だから」

自分のコーヒークップを持ち上げながら、朝比奈は言った。

「ふた月に一冊がやっとのペースなんだよね」

「それはわかっていきますけど……」

「一日十枚書くと、手が痛くなっちゃうんだよ。それに、二日書いたら一日は遊びたくなるしね。……だから、月産二百枚がぼくのバッケンレコードなわ

けよ。」

「いつも言ってることですけど、いいかげん筆ペンなんかやめて、ワープロにしたらどうです」

高木は言った。

「そうしたら、ずっと執筆量はあがると思いますよ。それにフロッピーディスクで入稿してくれたら、こっちも作業がラクだし」

「ダメ、目に悪いから」

朝比奈はあっさりと言った。

「どんなに時代遅れだと言われようと、ファミコンとワープロには手を出さないことに決めたんだ」

「一時期は手を出しかかっていたのに。『伊豆の瞳』殺人事件」は、朝比奈さんにワープロの知識がなかったら解決できなかった事件ですよ」

「あのときはあのとき、いまはいま。とにかくやめたの」

「強情だなあ」

高木は、やれやれというふうのため息をついた。

「それで高木さんの話って、なんなの」

「じつはですね、ぼくも朝比奈さんにノンフィクションを書いてもらえたらな、と思っっていたんですよ。いわゆるドキュメントを」

「推理小説じゃなくて、ノンフィクション？」

朝比奈は意外そうな顔をした。

「なんでまた、ぼくにそんな話を」

「ぼくは、朝比奈さんの緻密な取材力に、つねづね

感心させられていたんですよ」

「急にほめられると気持ち悪いんだけど」

「いやほんとうに、お世辞抜きで。だから、この人がノンフィクションに挑戦したら、きつとすごいものができるんじゃないか、と」

「だけど、具体的にテーマがあるの」

「あるんです、ちゃんと」

ガラスを載せた藤のテーブルに片肘をついて、高木は身を乗り出した。

「朝比奈さん、『宝島』って知っていますか」

高木の言葉に、朝比奈はしばらくキョトンとした顔をしていた。

「まさか知らないっていうんじゃないでしょうね」

朝比奈がすぐに返事をしないので、高木は重ねて問いただした。

それでやっと朝比奈は口を開いた。

「『宝島』って、あの海賊の物語の？」

「はい」

「だったら知ってるよ。えーと、たしか片腕をワニに食べられて、鉤の義手をはめている船長が出てくるんだったよね」

「それは『ピーターパン』でしょ」

「あ、そうそう、思い出したよ。あれはキャプテン・クックだったな、ワニに片腕をとられた船長は」
「ちがいますってば。『ピーターパン』に出てくる鉤の手の船長は、キャプテン・フック。クックじゃなくてフックです」

「フック……」

「ええ。スピルバーグの映画で『フック』っていうのがあったでしょう。ロビン・ウィリアムズがピーターパンを演じたやつ」

「ああ、そういえば……」

朝比奈は、勘違いに気がついた。

「キャプテン・フックは『ピーターパン』に出てくる架空の人物だったね。キャプテン・クックというのは、実在する海賊の名前だった」

「いいえ、それはキャプテン・キッド。クックじゃなくてキッド」

「え……」

また朝比奈は、覚え違いを指摘された。

「キャプテン・クックというのは、十八世紀の後半に活躍したイギリスの軍人で探検家ですよ」

高木は言った。

「三度にわたる太平洋の大航海を通じていろいろなことを発見した人で、たとえばニュージーランドやニューギニアが大陸ではなく島であることを確認していますし、オーストラリアの領有宣言もしました。それからハワイ諸島を発見したのも彼です。最後は、そのハワイで地元の住民に殺されてしまうんですけどね」

高木の説明を聞いて、朝比奈はますます混乱した顔になった。

「すると、キャプテン・キッドというのは」

「十七世紀の後半にウィリアム三世の命を受けて海

賊の征伐^{せいばつ}に向かったが、それをやっているうちに自分自身が海賊になっちゃったという男です。最終的にはニューヨークで逮捕されて、イギリスに護送されて死刑になりました」

「ややこしいなあ、フックにクックにキッド」

朝比奈は、天井を見上げてため息をついた。

「でも、なんで高木さんが、そんなに探検家や海賊のことに詳しいの」

「朝比奈さんがこういうカンちがいをするんじゃないかと思って、あらかじめ調べておいたんですよ」

「またまた……」

「それで話は『宝島』に戻りますが」

まじめな顔で言う、高木は、そこから先はシステム手帳を広げて、そこに書き留めたメモを見ながらつづけた。

「この作品はイギリスの小説家、ロバート・ルイ

ス・ステイブンソンが書いた処女長編で、『ヤング・フォークス』という少年向けの新聞に、一八八一年十月から翌年の一月にかけて連載されたものなんです」

「そうだ……急に思い出したけど」

朝比奈は、自分のひざを叩いた。

「片腕の船長じゃなくて、片脚の船乗りが出てこなかったっけ」

「出てきますよ。一本脚の海賊ジョン・シルバー」
「それぞれ。……で、どういうストーリーだったっけ」

「思いきりかいつまんで話しますと、主人公はジム・ホーキンスという少年で、後日、大人になった彼が事件当時の模様を回想して書くという一人称形式になっています。子供向けの童話本は三人称にアレンジしてありますけどね」

カップの底に残っていたコーヒ―をすすつてから、高木はつづけた。

「ジムの家はイギリスの港町で宿屋をやつていましたが、ある日、その宿に泊まった船乗りをめぐる海賊どうしの争いに巻き込まれたジムは、一枚の地図を手に入れました。それが、フリントという海賊がこれまでに得た財宝を隠したという宝島の地図だったんです」

高木は、朝比奈をまっすぐ見つめて語りつづけた。

「ジム少年から相談を持ちかけられた医者のリブジ―先生と地主のトリローニさんは、これが本物の宝島の地図だとわかつて、船を仕立てて宝探しに出かけることにしました。その費用は、すべて大金持ちのトリローニさんが用意します。彼らはヒスパニオリ号という三本マストの帆船を仕立てて、ブリストルから出港することになりました。この船の船長

はスモレットといい、雇った水夫の中に、さきほど話した一本脚のジョン・シルバーがいるんです。で、このシルバーをはじめとする水夫たちの歌う歌というのが……」

高木は、適当な節をつけて、いきなり歌い出した。「死人の箱にやあ十五人

よいこらさあ、それからラムが一縷と！

残りのやつは酒と悪魔がかたづけた

よいこらさあ、それからラムが一縷と！」

「ああ、覚えているよ、その歌の文句」

朝比奈が眼を輝かせた。

「どういうわけか、すっかり頭の片隅に刻み込まれているなあ。まちがいないく、子供のころに読んだ物語に、その歌が出てきたのを覚えている」

「やっぱり記憶にありますか？」

「うん。頭にバンダナみたいなのを巻いて、片目に